



# 血管カテーテル治療について

放射線診断科部長兼

画像診断センター長

おおかわ よしひさ  
大川 賀久

放射線診断科ではCTやMRIなどの画像診断以外に血管カテーテル治療を行っています。これはカテーテルという軟らかいチューブを血管内に入れてさまざまな治療を行うものです。外科手術と比較して体への負担が格段に少なく、傷もほとんど残りません。例えば肝臓がんで何らかの理由で手術が行えない場合にはこの治療法の出番となります。がんの栄養を運ぶ動脈にカテーテルを進め、抗癌剤や血管を閉塞させる塞栓物質を注入します。栄養が届かなくなつたがんは縮小し、消失することもあります。体への負担が少ないため再発がんに繰り返し行うことも可能で、肝臓がん治療の一つの柱となっています。

また出血の治療にも力を発揮します。肺からの喀血、消化管出血、交通事故などで傷ついた肝臓などからの出血、産後の子宮出血などに対して、出血している動脈にカテーテルを進め、塞栓物質を詰めて止血します。放射線診断科ではこれらの治療を年に約60件行っています。この治療法はX線テレビを使用するため放射線被ばくを伴います。最新の機器を使用しており低被ばくで行えますが、X線テレビの使用時間をできる限り短くするように常に配慮しています。血管カテーテル治療は患者さんが受ける利益が放射線被ばくや合併症の危険よりも上回る場合に、患者さんに十分な説明をして納得いただいた上で行っています。そのため安心して血管カテーテル治療を受けることができます。



# 加熱すれば食中毒は防げる？ 〜移り行く食中毒事情〜



静岡県立農林環境専門職大学  
准教授

ないとう ひろたか  
内藤 博敬

「食中毒」は夏の季語ですが、現代の日本では事件数、患者数ともに夏にピークはなく、一年を通じて起ります。こう書くと食中毒は増えているようですが、実際は逆に激減しています。25年程前には年間約3千件あつた事件数は千件を下回り、年間4万人いた患者数も1万人を切っています。この理由は、言うまでもなく食品添加物の適正利用と流通や販売時の冷蔵保管技術の向上などによるものです。こうした科学技術の正しい利用によって、日本人は寿命も健康寿命も世界一を維持できているのです。

食中毒の予防といえば、病原体を「付けない」「増やさない」「除く」の三原則で、新鮮な食材をしつかり加熱調理することが推奨されています。しかし、食中毒は加熱調理だけでは防ぐことができません。先日、病院の食堂で前日に作り置きした惣菜による食中毒の報道がありました。が、提供時には加熱していたとのこと。原因となつた病原体はウエルシュ菌で、2022年の食中毒報告では患者数が第一位の細菌です。加熱調理後、翌日まで放置することがあるカレーや肉じゃがなどを原因とした報告が多いです。多くの細菌は熱で殺菌できるのですが、この菌は環境が悪くなると形態を変化させて休眠し、増殖できる状況になるのを待ちます。他にも熱や消毒薬に強い菌や毒素がありますので、調理後はできるだけ速やかに食べ切ってしまうことを心がけましょう。どうしても保存するのであれば冷蔵・冷凍保存してください。



# あなたの情報が磐田市を救う

地域密着型ニュース速報アプリで「市民総記者」へ



ニュースダイジェストの「リアルタイム防災マップ」(参考例)

☎ 0538-37-2114

FAX 0538-32-0177



## 地域密着型ニュース速報アプリ News Digest ニュースダイジェスト

今年6月、(株)JX通信社と磐田市は連携協定を締結し、(株)JX通信社が開発したアプリ「ニュースダイジェスト」を活用した地域(災害)情報の収集・共有を行っています。

このアプリでは、身の回りの出来事(災害など)を匿名で情報提供でき、その情報をAIや人が確認をして誰もが閲覧できる地図上に掲載されます。また情報提供者には、PayPayなどに交換できるポイントが付与されます。

市民の皆さんが記者となり、情報提供することが磐田市の安全安心につながり、市民を救うこととなります。

アプリのインストールは無料です。ご利用する際には、アプリをインストールした後に地域設定を「磐田市」に設定してください。



News Digest  
ホームページ  
※操作手順などはこちらから



Androidは  
こちらから



iOSは  
こちらから

### 「ニュースダイジェスト」をご利用するときの流れ



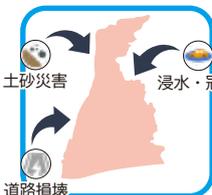
#### ①危険発見

浸水・冠水、土砂災害、道路損壊など、地域の危険を発見



#### ②匿名提供

「情報提供機能」を使って画像や動画を匿名で情報提供



#### ③状況把握

共有された情報を「リアルタイム防災マップ」で確認



#### ④ポイント獲得

情報提供した方にはPayPayなどに交換できるポイントを付与



# 大クスの下から

第26回

## 歴史から学ぶ災害の教訓と備え

市長 草地博昭

本市は、6月2日からの台風第2号に伴う豪雨によって、昨年引き続き災害に見舞われました。梅雨を迎え、特に大雨の傾向がみられる7月下旬からの台風シーズンを前に、豪雨災害の備えについて啓発をしようとしていた矢先の出来事でした。

しかも、昨年の台風第15号により決壊し、県による仮復旧の工事が行われた敷地川の仮堤防が決壊し、再度同じ地域が被災するという事態となりました。被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。市では引き続き、復旧・復興に向けた支援を進めてまいります。県に対しても、仮復旧であった堤防を早期に強化すること、そして前回はおおむね市単独で実施した被災者支援についても協力してほしい旨を強く要望しました。

今回の被災を受け、先人たちが残した文献を調査し、特に敷地川における水害の歴史を紐解いてみました。すると、昭和以降だけでも、昭和27年に3度、そして昭和49年には有名な七夕豪雨と複数回、水害に見舞われ、そのたびに大きな河川改修を繰り返し、安心できる環境を築いてきたことがわかりました。改めて、被災された皆さまに寄り添い、不安をぬぐうとともに、今後もこの豊かな地域で安心して暮らし続けることができるよう基盤を築き直し、その記録を書き留めておこうと心に誓いました。

皆さまがお住まいの地域にも、それぞれに先人が向き合ってきた災害との闘いの記録が残されています。過去の教訓を活かし、災害に備えていきましょう。